

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.279

2016年8月

「ホシザキ奨学金」設立に対する感謝状贈呈式を挙



目次

●ニュース

「ホシガキ奨学金」設立に対する感謝状贈呈式を挙	3
オリンピックに出場する鈴木亜由子選手が松尾総長を表敬訪問	4
ITbM が平成28年度 CFT 構造賞を受賞	4
松尾総長が「名古屋大学で何を学ぶか」と題して講義	5
第1回名古屋大学卓越・先端・次世代研究シンポジウムを開催	5
アントレプレナーシップ教育「Tongali プロジェクト」が盛大にキックオフ	6
全学同窓会遠州会支部第11回総会を開催	6
学術奨励賞授与式を挙	7
キャンパスコンサートを開催	7

●知の先端

仮想生物の生態・進化・発生系を用いて生命を理解する	8
---------------------------	---

有田 隆也（大学院情報科学研究科教授）

●知の未来へ

世界最高エネルギーの粒子加速器を用いて、新粒子発見に挑む	10
中浜 優（素粒子宇宙起源研究機構現象解析研究センター准教授）	

●部局ニュース

未来材料・システム研究所設立記念行事を挙	11
情報学シンポジウムを開催	12
統合物質創製化学研究推進機構（IRCCS）開所式及び記念講演会を挙	12
ICCAE 第3回オープンセミナーを開催	13
達人と話そう「おもしろ博物学」を開催	13
ミクロの探検隊®を開催	14
第15回特別企画展「平成28年熊本地震」を開催	14
シンポジウム「熊本地震に学び、今後に備える！」を開催	15

●名大を表敬訪問された方々

●新たに締結した学術交流協定

●構成員を対象とした研修

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成28年6月16日～7月15日	17
---------------------------------	----

●INFORMATION

第12回名古屋大学ホームカミングデー	20
「環境と経済が共存する持続可能社会の実現に向けて」を10月15日（土）に開催	
概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2016」を刊行	21

●イベントカレンダー

●表紙サークル紹介

●ちょっと名大史

25年前の名大祭 — 名大祭いまむかし② —	24
------------------------	----

「ホシガキ奨学金」設立に対する感謝状贈呈式を挙





- 1 記者会見の様子
- 2 贈呈式での記念撮影（左から総長、坂本取締役、坂本社長、鶴飼学長）
- 3 握手を交わす坂本社長と総長（左は坂本取締役）

本学及び名古屋工業大学における「ホシザキ奨学金」設立に対する感謝状贈呈式が、6月24日(金)、豊田講堂第1会議室において合同挙行されました。

この「ホシザキ奨学金」は、フードサービス機器メーカー・ホシザキ株式会社の会長兼社長ご夫妻が設立した「坂本ドネーション・ファウンデーション株式会社」の株式をご寄附いただき設立したもので、「ものづくりを学ぶ、将来ある学生を支援したい」とのご夫妻の意向を受け、給付型奨学金として経済的に困窮した学生に対して給付するものです。

奨学金の支給対象者は、工学部系の3、4年生と大学院生です。給付金額は、毎月12万円が原則2年間支給されます。今年度は両大学から5名ずつ選考し、次年度からは各18名、以降は、各22名と増やしていきます。

本奨学金は、有価証券の配当金を原資に奨学金を運用する日本初の取り組みで、多くの学生を継続して支援することが可能となる手法であることから、このような手法が広まることに期待を込めて、通常は大学関係者のみで



式典が執り行われるところ、当日は、各メディアを呼び、式典後に記者会見も併せて行う盛大なものとなりました。

感謝状贈呈式では最初に、松尾総長から寄附者である坂本夫妻に、「感謝状」及び「記念品」（レーザーで豊田講堂をかたどったクリスタル）を贈呈しました。引き続き、鶴飼裕之名古屋工業大学長から、同様に「感謝状」及び「記念品」（有松絞りの織物）を贈呈しました。

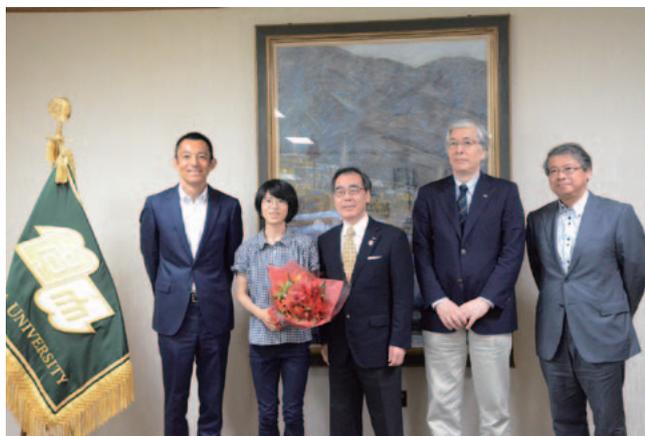
その後、坂本精志社長からあいさつがあり、総長、鶴飼学長から「ホシザキ奨学金」設立への謝辞が述べられま

した。終始、厳かでありながらも和やかに式が進みました。

小休憩の後、同会場において「ホシザキ奨学金」設立に対する記者会見を行いました。各記者からは、先の感謝状贈呈式では説明がなされなかった両大学への株式譲渡への趣旨や今後の各大学への期待等について、坂本社長へ質問がありました。また、会見終了後も記者からの質問に対し、丁寧に説明している坂本社長の姿があり、あらためて、今回の給付型奨学金である「ホシザキ奨学金」設立への思い入れと今後の両大学への期待を感じました。

オリンピックに出場する鈴木亜由子選手が松尾総長を表敬訪問

リオデジャネイロオリンピックに出場する本学卒業生の鈴木亜由子選手（2014年経済学部卒）が、6月28日（火）、松尾総長を表敬訪問しました。鈴木選手は、前週に行われた第100回日本陸上競技選手権大会において、女子10000mを31分18秒73のタイムで優勝し、女子5000mとあわせ2種目でオリンピックに出場します。



記念撮影

表敬訪問当日、鈴木選手は日本郵政グループ女子陸上部の高橋昌彦監督とともに本学を訪れました。あいにくの雨でしたが、本部1号館の玄関前では大勢の職員が鈴木選手を拍手で出迎えました。総長応接室では、総長、國枝理事、竹下理事、前島副総長、陸上競技部の山田主将が出迎え、冒頭、総長から鈴木選手に花束が贈呈されました。その後の懇談で総長は「日本選手権での鈴木選手の走りを見て感動した。本番でも積極的な走りに期待している」と鈴木選手を激励し、鈴木選手からは「オリンピックでは自分の力を精一杯出し、後輩の刺激になるような走りをしたい」とオリンピックに向けての抱負が述べられました。

なお、7月14日（木）には、豊田講堂前の芝生広場に鈴木選手のオリンピック出場を祝う横断幕が設置されました。

ITbM が平成28年度 CFT 構造賞を受賞

東山キャンパス内に平成26年度末に完成したトランスフォーマティブ生命分子研究所（ITbM）が、一般社団法人新都市ハウジング協会の主催する平成28年度 CFT 構造賞を受賞し、6月24日（金）、東京都内のホテルにおいて表彰式が行われました。表彰式は奥宮施設・環境計画推進室長、小松施設管理部長が出席し、賞状とメダルが授与され



表彰式の様子

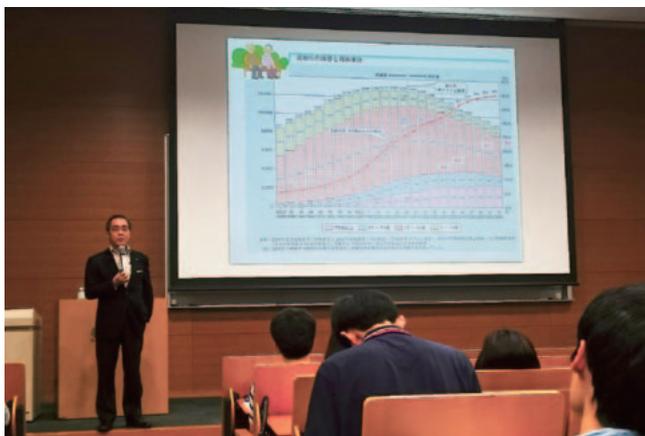
ました。

CFT造とは、鉄筋コンクリート（RC）造・鉄骨鉄筋コンクリート（SRC）造・鉄骨（S）造に続く第4の構造で、鋼管柱（鉄骨柱）にコンクリートを充填することにより、鋼とコンクリートが一体化して両者の特性を引き出せる構造形式であり、耐力・剛性・耐火に優れています。ITbMは、既設建物（旧極超高压発生装置棟）をエントランスホールに取り込んだ計画としました。そのため部分的に柱間隔が長くなってしまうことから、高耐力のCFT造を採用することで特殊な形状を実現しています。

平成12年に創設されたCFT構造賞は、過去に52棟の建物が受賞していますが、国立大学法人の建物としてはITbMが初めての受賞となります。これまでの受賞建物の多くが高層建物でしたが、ITbMのような中低層建物へのCFT構造普及に繋がる事例という点において高く評価を受けました。

松尾総長が「名古屋大学で何を学ぶか」と題して講義

松尾総長は、6月21日(火)、IB電子情報館大講義室において、「名古屋大学で何を学ぶか？ー人類社会の幸福と持続的発展に貢献する『勇氣ある知識人』になるためにー」と題して講義を行いました。これは、大学文書資料室部門長である吉川卓治教授が開講する全学教育科目「名大の歴史をたどる」の1回で、正規受講生と本学の教職員（今回



講義をする総長

に限り特別に許可)合わせて約250名が聴講しました。

総長は、本学が育成をめざす人物像として掲げる「勇氣ある知識人」について、名古屋大学憲章を参照しつつ、具体的な事例を挙げながら丁寧に説明しました。

総長は、日本は世界に先駆けて超高齢化社会を迎えるが、世界各国も日本を追うように高齢化しており、日本がこの問題を解決できれば、逆に世界をリードする国になれるチャンスでもあると説明し、その上で「本学は、高齢化しても活力を失わず、多様性が尊重されつつ人類の幸福と発展が持続する社会をビジョンとしている」と述べました。

また本学はこれを実現するため、すでに世界トップレベルにある自然科学だけではなく、社会科学・人文科学の分野も強化し、諸分野が協力して問題の解決に取り組む体制を構築すると述べました。そして21世紀は文理融合型の学問の時代になるとして、とくに若いうちは専門領域にとられない幅広い勉強をしておくことが重要で、それが将来大きく伸びる秘訣であると学生たちに熱心に語りかけました。

この講義の様子は、NUOCW（名大の授業）のインターネットサイトで視聴することができます。

第1回名古屋大学卓越・先端・次世代研究シンポジウムを開催

高等研究院は、6月29日(水)、文学研究科・教育発達科学研究科・法学研究科・経済学研究科・国際開発研究科・国際言語文化研究科の文系6研究科と協力して、第1回名古屋大学卓越・先端・次世代研究シンポジウム「人文社会系における知の創造と継承」を開催しました。

このシンポジウムは、次世代を担う若手研究者と卓越・



総長による講演

先端研究を行っているシニア研究者の優れた研究を内外に発信すると同時に、分野を超えた刺激をお互いが受け、学際的な交流を促進する事を意図しています。

第1回は文系6研究科の12名が発表しましたが、他分野からの聴講者を意識して分かりやすい研究内容の紹介に努め、とりわけ若手研究者からは将来の展望が語られ、シニア研究者からは現在の各研究科での状況説明なども行われました。聴講者と学問分野を超えた質疑応答があり、参加者にとって良い刺激があったイベントになりました。

松尾総長をはじめ國枝理事、市橋理事、木村理事、木俣副総長も参加し、総長からは、「あらためて文系で優れた研究が行われていることを知った。文系の学問が優れていることをもっと社会に発信する力を高めていって欲しい」との講話がありました。このシンポジウムは今後定期的に文系理系問わず各研究科と協力して学際的な交流が図れるように開催していく予定です。

アントレプレナーシップ教育「Tongali プロジェクト」が盛大にキックオフ

第1回 Tongali シンポジウムが、7月2日(土)、名古屋駅前にある大名古屋ビルヂング最上階のオルクドールホールにおいて開催されました。東海地域の学生を中心に総勢100名を越す盛大なイベントとなりました。基調講演「ウォルト・ディズニーのイノベーション～エンターテインメントと技術～」では、塚越隆行ウォルト・ディズニージャパン



ウォルト・ディズニーのイノベーションを語る塚越氏

株式会社スタジオ・グループ・ゼネラル・マネージャーから、ウォルト・ディズニーが世界中の人々を魅了し続けるために、いかにイノベティブな挑戦に臨んできたのが紹介されました。続くイノベーターズトーク「カリスマに聴け！」では、「やりたいことを見つけて、実現する!」「夢・挑戦・起業?」「ベンチャーって儲かるの?」という3テーマについて、トップレベルの起業家(イノベーター)と学生とでグループ討議が行われ、熱の入った意見交換が繰り広げられました。学生は、イノベーターとの直接対話によって、起業や夢への挑戦に必須であるイノベティブなマインドを大いに揺さぶられました。

主催した学術研究・産学官連携推進本部は、東海地域から積極的に事業化にチャレンジする人材の輩出を目指すアントレプレナーシップ教育「Tongali (とんがり) プロジェクト」を開始したところで、本シンポジウムはそのキックオフイベントとして開催されました。9月からは Tongali スクールが開講します。首都圏に比べ、これまでアントレプレナーシップ教育が手薄だったこの地域に、Tongali プロジェクトは新たな潮目をもたらす取組として産業界からも注目されており、今後の展開に期待が高まっています。

全学同窓会遠州会支部第11回総会を開催

名古屋大学全学同窓会遠州会支部第11回総会・第21回同窓会懇親会が、6月18日(土)、浜松市内のホテルにおいて開催されました。来賓として松尾総長と伊藤義人全学同窓会代表幹事を迎え、会員60名が出席しました。

総会開始前に集合写真を撮影し、総会では庄田 武会長のあいさつのあと、来賓として総長から松尾イニシアティ



出席者集合写真

ブ「NU MIRAI 2020」の狙いと現在の進行状況についての詳しい説明がありました。続いて平成26年度、27年度の事業報告、会計報告・監査報告、役員改選と会則変更の審議を行い、南方 陽氏が会長に、黒木辰芳氏と長嶋孝昌氏が副会長に選任されました。

総会終了後、会場を変更しての懇親会では、伊藤代表幹事から「全学同窓会14年のあゆみ」と題しての講演を行いました。その後、会食をはじめ、用意した本学オリジナル商品や幹事提供の品物を景品としたビンゴゲームを実施し、老若男女大いに盛り上がり、和やかな会となりました。

学術奨励賞授与式を挙る

平成28年度名古屋大学学術奨励賞授与式が、7月6日(水)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

同賞は、学術憲章に定める「人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする」という基本理念に基づき、本学の大学院博士課程後期課程に在学する特に優秀、かつ、将来有望な学生に対して、その教育研究活動を奨励することを目的に、平



記念撮影

成23年度に創設された顕彰制度です。今回の受賞者は8名であり、過去5回の受賞者を加えると同賞の受賞者は43名となります。受賞者には、表彰状及び副賞として学業奨励金80万円が授与されました。

授与式には、松尾総長をはじめ理事、研究科長、指導教員等が列席し、総長からは「みなさんの活躍は、後輩の学生やメンターの先生にも勇気や希望を与えるため、今後も一層、研究に励んでいただき、さらには、個々の研究領域に留まらず、様々な領域を融合させることにより、人類社会が直面している複雑で解決が困難な問題に対しても、果敢に挑戦していただきたい」と激励の言葉がありました。

受賞者は以下のとおりです。

【人社系】	大学院法学研究科	加藤 紫帆
【理工系】	大学院理学研究科	柴山 拓也
	大学院工学研究科	村手 宏輔
	大学院工学研究科	小林 泰介
	大学院多元数理科学研究科	藤野 弘基
【生物系】	大学院理学研究科	伊藤 亜実
	大学院生命農学研究科	吉田 英樹
	大学院創薬科学研究科	志甫谷 渉

キャンパスコンサートを開催

本学及び愛知県立芸術大学の共催によるキャンパスコンサートが、7月11日(月)、豊田講堂において開催されました。このコンサートは、愛知県立芸術大学と連携して、年2回程度、開催しています。

当日は約400名が豊田講堂に来場しました。平成26年に結成された愛知県立芸術大学及び同大学院出身の3名によ



演奏の様子

る「Trio des fraises【トリオ・デ・フレーズ】」のクラシックコンサートは、A. ピアソラの情熱的な「リベルタンゴ」で幕を開け、優雅なJ. マスネの「タイスの瞑想曲」に続き、C. サンサーンスの名曲「白鳥」では、静かに湖の上を滑るように泳ぐ白鳥を連想させるようなピアノ、ヴァイオリン、チェロの響きに会場が酔いしれました。最後はショパン作曲「ピアノ三重奏曲ト短調より第一楽章」で締めくくりました。アンコールの前には、チェロ奏者の紫竹友梨さんが、当日身にまとっていた目が覚めるほど真っ赤な衣装について、名古屋ゆかりの有松絞りで、楽器や演奏にあわせて衣装を作っており、世界にただ一つしかないと解説しました。アンコールでは、モンティの代表曲である「チャールダッシュ」が披露され、ヴァイオリンの素早い指裁きに会場は拍手喝采で幕を閉じました。終了後は、出演者もロビーであいさつに立ち、来場者と写真撮影をするなど、終始、和やかでありながら華やかさを醸し出していました。厳しい暑さが続く名古屋ですが、爽やかな心地よい音色に、暑さも忘れる夕刻の一時でした。

次回は12月22日(木)に開催しますので、みなさま、是非、お越しください。

仮想生物の生態・進化・発生系を用いて生命を理解する

有田 隆也 大学院情報科学研究科教授

1940年代に自然選択理論と遺伝学の知見が結合して成立した進化の総合説は、現代進化理論の支柱となっています。しかし、個体発生が軽視されていたため、1980年代に「進化発生生物学 (evo-devo)」が成立し活発化しています。進化を発生パターンの変化とみなすスタンスです。さらに近年、「生態」を加えた「生態進化発生生物学 (eco-evo-devo)」が注目を集めています。そこで、問われていることは、以下のようなことです。

- ・進化は発生をいかに生み出し、拡張するか？
- ・発生はいかに表現型可塑性の多様化に関わり、新たな表現型の発現に貢献するか？
- ・環境はいかに発生や進化と相互作用するか？

私たちは、時間空間におけるマイクロマクロを統合して生命を理解しようとする eco-evo-devo に対し、「創って理解する構成的方法論」と「マイクロマクロを接続する創発現象への視座」によって人工生命は大きく貢献できると考え、研究してきました。ここで強調したいことが一つあります。仮想環境で繰り返し広げられる進化は、仮想世界の創造主たる我々の想像を超える仮想生物の体構造や

行動を生み出すという意味で、真にクリエイティブな進化、オープンエンドな進化になりうるということです。

以下、最近行っている eco-evo-devo に関する研究（鈴木麗璽准教授、P. Marcin 博士、M. Joachimczak 博士、伊藤孝博士とのコラボ）から2つ紹介します。まず、「変態モデル」は、大多数の昆虫で見られる発生戦略である変態に焦点を合わせています。本モデルでは、一つの細胞から発生フェーズが開始します。各細胞は遺伝子情報で表現された同一の制御ネットワークを持っており、細胞分裂、あるいは細胞死を繰り返して体構造が完成します。仮想生物が行動するフェーズでは、体がバネによって連結された質点群と骨格から構成されると想定し、バネの局所的伸縮により移動します。

進化実験では、各個体で、発生フェーズを一定ステップ実行した後、水中での遊泳距離を測定します。引き続き、発生フェーズを再開して、一定ステップ、発生を実行した後、陸上での移動距離を測定します（図1）。このような適応度評価と、

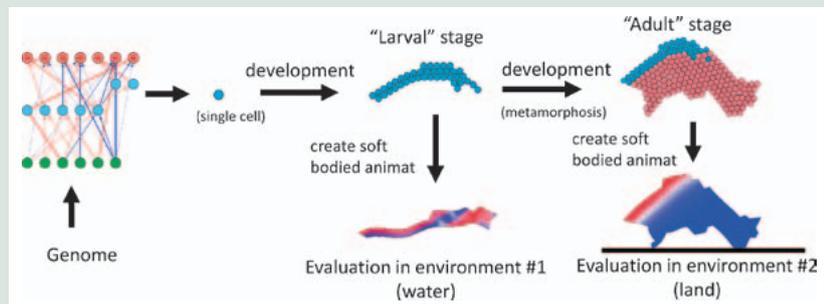


図1 変態モデルでの発生フェーズと行動フェーズ：細胞1個から発生を開始し、一定ステップ経過後に、第一の環境（水中）で適応度評価する。その後、発生を再開し、一定ステップ経過後に異なる環境（陸上）で適応度を評価する。各細胞において発生を制御するネットワークは同一であるが、進化の結果、それぞれの環境に適応した形態をとるようになる。

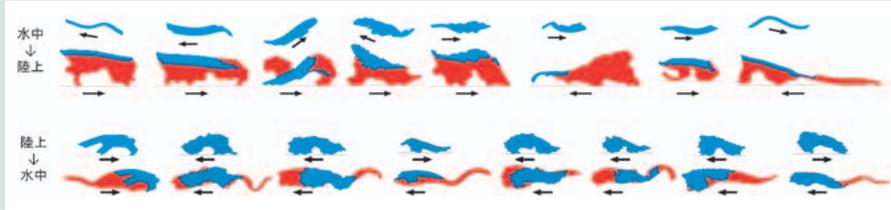


図2 変態モデルで進化した多様な仮想生物たち。上段は、幼生期は水中、成体になってからは陸上で適応度評価した結果。下段はそれを逆順にした結果。それぞれ8回の進化実験を行い、適応度が最大の個体の幼生と成体の形態を上下のペアで示している。矢印は移動する方向。

遺伝的操作による次世代集団の構成を繰り返します。その結果、多様に変態する仮想生物が得られました(図2)。典型的には、最初の発生フェーズで、水中で細長い体をくねらせて泳ぐようになり、次の発生フェーズで、前足と後足に相当する部分を成長させて、陸上では跳躍の繰り返しで移動します。一つの遺伝的表現なのに、2環境にそれぞれ適応した構造と行動をもつ仮想生物が進化したのです。この研究には、柔らかな材料で構成されたロボットの実現を目指すソフトロボティクスでの応用という展望もあります。

次は「捕食被食モデル」です。従来、集団を構成する個体の数の増減(群集ダイナミクス)と個体の形質進化(形質進化ダイナミクス)は、後者が前者に比べて長時間を要するので、別々に考えられてきました。しかし、両者は相互に影響し合うことが実証的に確認され、注目を集めています。

本モデルでは、捕食者と被食者の間で体構造と行動を共進化させるモデルを構築しました。全個体を同じ3次元環境下で行動させ(図3)、捕食の成功失敗と体積コストの両者で適応度を計算します。実験の結果、短時間スケールでは、捕食

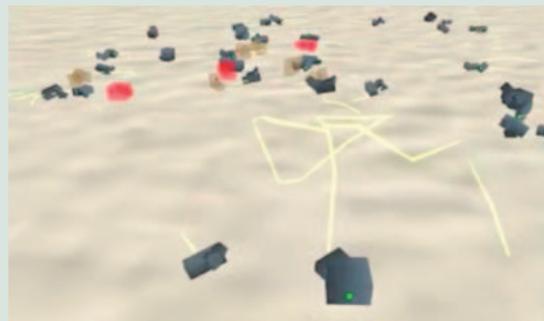


図3 捕食被食モデルでの捕食生物群と被食生物群: 両種を同じ環境に入れて行動させ、捕食成功/被食回避と、体積に応じたコストの両者によって適応度を評価する。仮想生物の遺伝子型は有向グラフで表現され、発生によって表現型グラフに変換される。表現型グラフのノードがブロック、リンクが関節を表し、同時に、行動制御のためのネットワークも表現する。映画の予告編風の動画が <https://www.youtube.com/watch?v=CoAyJzed5vo> にあります。

者数が被食者数を追いかけて振動しました。長時間スケールでは、個体数の増減によって進化対象が切り替わり、それによって進化した形質が個体数に影響するという、2つのダイナミクス間のフィードバックループが観察されました。本モデルを用いた絶滅予測の可能性も確かめました。

東京大学工学部計数工学科の卒業研究では、言語の起源をニューラルネットワークで研究。研究分野を言えない異端の研究であった。修士と博士では、コンパイラをハードウェア化したり、プログラム作成中にコンパイルを進める計算機科学分野の研究に従事。名古屋工業大学に就職して並列実行計算機を研究。本学に移って、一転、卒業研究で行ったような研究を自由に行う複雑系科学(人工生命)に飛びつき20余年。本稿紹介のような「生命はいかに進化しうるのか」、及び「ヒトはいかにヒトになりうるのか」ということを考えてきました。応用にも興味あり。

ありた たかや



中浜 優

素粒子宇宙起源研究機構現象解析研究センター准教授

世界最高エネルギーの粒子加速器を用いて、新粒子発見に挑む

スイス・フランス国境にまたがる CERN（欧州合同原子核研究機構）は、素粒子物理の分野で世界最大の研究機関であり、2012年7月の物質の質量起源である「ヒッグス粒子」の発見を報告して以来、広く一般的に知られるようになりました。

私は、CERN の世界最大（山手線一周とほぼ同じ周長27km）で世界最高エネルギー（13 TeV: 13兆電子ボルト）の陽子・陽子衝突型加速器 LHC を用いた、約3000名の研究者からなる国際共同実験アトラス実験に参加し、素粒子標準理論を超える新粒子の実験的探索を行っています。その中で、特に、超対称性粒子の発見を目指しており、超対称性粒子は、宇宙の重要な構成要素である「暗黒物質」の最有力候補であるので、素粒子・宇宙物理両方から関心度が高いと言えます。

物理の研究成果としては、(1) 超対称性粒子事象パターンと質量の相関の理解と (2) データの統計学的な処理技術を生かして、どのような事象パターンを持つ超対称性粒子事象に対しても常に統計的に最大の感度が得られるような物理解析の技術を開発しました。これまで発見には至っていませんが、1.5 TeV より軽いグルイノ、1.0 TeV より軽いスキャーク [1]、700 GeV より軽いトップスキャーク [2] を棄却することに成功しました。また、従来探索されていなかった検出が難しい事象パターンを持つ超対称性粒子をも、カバーすることにも成功しました [3][4]。今後は、よ

り高統計の実験データを用いて、更に重い質量を持つ超対称性粒子に迫ります。また、統計的にはまだ有意ではありませんが、ヒッグス粒子の約7倍の質量を持つ新粒子存在の兆候が現れ始めており [5]、アトラス実験からの研究報告から目が離せません。

実験遂行への貢献としては、膨大な実験データの中から研究に必要な部分を切り出して記録する「トリガー（引き金）」選別条件に関するコーディネーターを務めています。アトラス実験では、約3000名が興味に従って幅広い物理解析を行っています。これら全てを網羅する様に、約2000もの全トリガー選別条件「トリガーマニュー」を、物理の優先順位に基づいて開発・設計・決定しています。CERN に常駐し、実験データ取得時のトリガーマニューの運転も担当しており、不測のトラブルにも昼夜問わず対応しており、アトラス実験の良質なデータ取得を支えています。

今後も、CERN アトラス実験の現場最前線において超対称性粒子などの新粒子探索およびトリガー開発両方に強く貢献し続けたいと考えています。

- [1] 『Eur. Phys. J. C 76 (2016) 392』
- [2] 『Eur. Phys. J. C 75 (2015) 510』
- [3] 『Phys. Rev. D 87, 012008 (2013)』
- [4] 『JHEP 09 (2014) 015』
- [5] 『arXiv: 1606.03833 (JHEP に2016年6月に投稿)』



CERN アトラス実験コントロールルームにおいて、世界中から集まる共同研究者らがトリガー運転をしている様子

未来材料・システム研究所設立記念行事を挙行

●未来材料・システム研究所



記念講演会

未来材料・システム研究所は、6月23日(木)、研究所の設立を記念して、理学南館坂田・平田ホール及び研究所共同館Ⅱにおいて、設立記念行事を開催しました。

これは、昨年10月1日に、これまでのエコトピア科学研究所のミッションの見直しを行い、未来材料・システム研究所として改組したことに伴い、新たな研究棟として研究所共同館Ⅱが本年3月に竣工されたことを記念して、記念講演会、記念式典、施設内覧会及び記念祝賀会を執り行ったものです。

記念講演会の冒頭では、興戸未来材料・システム研究所長から、「未来材料・システム研究所の改組・拡充について」と題して、新しい革新的省エネルギー研究を先導する研究所の概要について説明がありました。また、天野 浩未来材料・システム研究所教授からは、「未来エレクトロニクス集積研究センター紹介」と題して、研究所の附属施設として設立された同センターが取り組む「省エネルギー社会に資する次世代半導体研究開発」、GaN 研究コンソーシアム、研究組織等についての説明がありました。

続いて、幾原雄一東京大学大学院工学系研究科総合研究



会場の様子 (記念式典)



記念式典

機構ナノ工学研究センター長から、「最先端透過電子顕微鏡法の新展開と界面構造」と題して、電子顕微鏡における最先端の研究について講演が行われました。

さらに、橋詰 保北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター長からは、「GaN 系トランジスタの進展と課題」と題する講演が行われ、170名を超える参加者は、最先端の研究に熱心に聞き入っていました。

記念講演会終了後、引き続き、同ホールにおいて、設立記念式典が挙行され、興戸所長の式辞にはじまり、松尾総長のあいさつでは、研究所は窒化ガリウムに関する次世代半導体の研究を行うだけでなく、エネルギーの創出・変換、畜積、伝送、消費の高度化・超効率化の全体を視野に入れた革新的省エネルギーのための材料から社会実装に至る幅広い研究を行うことにより、画期的な成果が生まれることへの期待が述べられました。

続いて、牛尾則文文部科学省研究振興局学術機関課長の来賓祝辞では、今年度から共同利用・共同研究拠点として認定された研究所は、学内外・国内外の研究者との共同利用・共同研究を推進することにより、研究所のミッションである環境調和型持続可能社会の実現に寄与することへの期待が述べられました。さらに、橋詰北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター長、岡部一彦中部電力株式会社専務執行役員・技術開発本部長からの来賓祝辞においても、研究所への大きな期待の言葉が述べられました。

記念式典終了後は、会場を研究所共同館Ⅱに移し、施設内覧会と称して、実験室・実験装置の公開が行われるとともに、若手研究者等から現在、研究所が取り組んでいる最新の研究内容について紹介がありました。

施設内覧会終了後は、研究所共同館Ⅱ 2階ホールにおいて記念祝賀会が盛大に開催され、國枝理事のあいさつ、新美工学研究科長による乾杯の発声、田中信夫日本顕微鏡学会会長、柿本浩一日本結晶成長学会会長から祝辞が述べられるなど、盛況のうちに閉会しました。

情報学シンポジウムを開催

●大学院情報科学研究科

大学院情報科学研究科は、7月14日(木)、理学南館坂田・平田ホールにおいて、名古屋大学情報学シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、平成29年4月に新たに「情報学部・情報学研究科」(仮称)の設置を計画していることに先駆け、「情報学が開く新しいものづくり・ことづくりの時代



満席となったシンポジウム会場の様子

が、どのような価値創造をもたらすか」をテーマとして開催したもので、学内外から約280名が参加しました。

シンポジウムでは、松尾総長と小松親次郎文部科学審議官のあいさつに続いて、株式会社 ACCESS 共同創業者である鎌田富久 TomyK 代表、武田浩一日本 IBM 基礎研究所技術理事の招待講演が行われました。続いて、安田情報科学研究科長から情報学部・情報学研究科(仮称)の設置構想説明の後、情報学の幅広い研究成果の一例として「自動運転を支える情報学」のデモンストレーションが屋外で催されました。さらに、情報科学研究科の戸田山和久教授、杉山雄規教授、武田一哉教授が社会科学・物理学・データサイエンスのそれぞれの立場から、話題の自動運転技術に情報学がいかに貢献していくかについて研究発表があり、いずれの講演も参加者は熱心に耳を傾けていました。また、新しい学部・研究科の設置構想と新しい専攻の研究テーマなどがポスターでも紹介されました。シンポジウムに引き続き開催された情報交換会では、前事務次官である土屋定之文部科学省顧問からのあいさつもいただくなど、当日は大盛況のうちに新組織発足にむけたプレ行事を終了しました。

統合物質創製化学研究推進機構(IRCCS)開所式及び記念講演会を挙

●物質科学国際研究センター

物質科学国際研究センターが、北海道大学触媒科学研究所、京都大学化学研究所、九州大学先導物質化学研究所と連携する「統合物質創製化学研究推進機構」が今年4月に発足し、6月22日(水)、野依記念物質科学研究館2階講演室において開所式及び記念講演会が開催されました。

開所式では、機構長である巽 和行物質科学国際研究セ

ンター特任教授よりあいさつがあり、続いて松尾総長のあいさつ、来賓の牛尾則文文部科学省研究振興局学術機関課長による祝辞のあと、阿波賀物質科学国際研究センター長より、本機構の事業内容説明がありました。

式典に続き記念講演が行われ、野依良治特別教授が「時代に生きる物質化学研究機構」と題して講演し、続いて天野 浩未来材料・システム研究所教授他の講演も行われました。

記念講演のあとには、牛尾学術機関課長、國枝理事もパネリストとして加わったパネルディスカッションが行われ、これからの機構が目指すものについて、熱い討論が繰り広げられました。パネルディスカッションの進行中には、客席からも意見が出るなど、会場全体が大変な盛り上がりを見せていました。



パネルディスカッションの様子

ICCAE 第3回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、7月12日（火）、農学部第8講義室において、2016年度第3回オープンセミナーを開催しました。今回は、京都大学アフリカ地域研究資料センター副センター長である伊谷樹一教授が、「タンザニア・環境劣化の最前線における循環型資源利用モデルの構築」について講演しました。



伊谷教授による講演の様子

アフリカ諸国は、2000年代の中頃から世界的な鉱物資源価格の高騰を受けて都市が急速に発達していますが、農村部では依然として経済の停滞が続いています。そして、都市との経済格差は深刻な環境破壊を引きおこし、さらには国家レベルのエネルギー不足をも招いています。環境・エネルギー問題の解決にとって農村社会における生活の安定は不可避であり、食料生産の向上と経済の活性化なしに生態環境を修復・保全することはできません。このような背景から、本セミナーでは伊谷教授が長年に渡りタンザニア半乾燥地域の農村において取り組んでいる、循環型資源利用モデルの構築に向けた活動が紹介されました。伊谷教授の講演を受けて、対象地域を俯瞰した総合的な農村開発の重要性について活発な議論が展開されました。

達人と話そう「おもしろ博物学」を開催

●博物館

博物館では、名古屋市教育委員会生涯学習推進課と連携して、5月28日（土）、6月4日（土）、6月25日（土）に達人と話そう「おもしろ博物学」を開催しました。

5月28日（土）は、吉川卓治教育発達科学研究科教授が、「名古屋大学のあゆみと地域社会」と題して、本学の始まりとされている明治4年の開校日が、5月1日ではなく8

月8日ではないかということから、名古屋帝国大学までの新しい大学史を交えた講演が行われました。

6月4日（土）の杉谷健一郎環境学研究科教授の「謎の原始生命-30億年の秘密-」では、初めて地球に生まれた生物の証拠となる岩石を示し、その発見過程から科学的証拠まで、30億年昔に聴衆を誘いました。

6月25日（土）の吉田英一博物館教授の「生物遺骸を保持する“タイムカプセル”-球状コンクリーションの謎に挑む-」では、コンクリーションとは何かから、ツノガイのコンクリーションの炭素が、ツノガイの軟体部由来だということまで、わかりやすく解説しました。

この企画は博物館が毎年行っているものですが、「文系の講演会が聞きたい」という過去のアンケート結果を反映し、今年は文系も交えた講演会でしたが、普段は接する機会のない専門家のかみ砕いた話に、いずれも活発な質疑応答がありました。アンケート結果も「少し難しかったが大変面白かった。また参加したい」など、たいへん好評でした。



吉田博物館教授の講演の様子

ミクロの探検隊®を開催

●博物館

博物館は、7月9日(土)、「ミクロの探検隊®名古屋大学ムシを電子顕微鏡で観察しよう 観察園のムシ」を24名の参加者とともに開催しました。

あいにくの雨模様で、観察園でのムシの「ピーティングネット」採集は中止になりましたが、事前に用意したムシを使用してプログラムを進めることが出来ました。午前中



実体顕微鏡下のムシのスケッチをする参加者

は、実体顕微鏡を使ったムシの観察・スケッチ・写真撮影を行いました。最初は慣れない実体顕微鏡でしたが、30分もすると小学生も上手に使いこなすようになりました。また、顕微鏡スケッチも飽きずに一心に取り組み、「見たい、知りたい」という熱心な気持ちが伝わってきました。午後はいよいよ各自で行う電子顕微鏡観察です。自分が作った電子顕微鏡試料が、目の前の画面に映し出され、どんどんと倍率が上がっていくと歓声が沸きました。可視光では見えない世界でも、そこには思いもかけないきれいな形(構造)があります。また、構造がムシにとってどんな意味があるのかを講師の先生方から説明を受け、熱心に聞き入っていました。初めて操作する走査型電子顕微鏡に最初は緊張気味でしたが、慣れてくると自分の手でどんどん拡大されていくミクロの世界にすっかりひきこまれていったようでした。最後に自分自身で撮影した電子顕微鏡写真のポストカードを作り、記念として持ち帰りました。

博物館では展示だけでなく、自然を知ることが真の教育と考え、また、それが科学や芸術にも繋がると考えて、ミクロの探検隊などのイベントに取り組んでいます。

第15回特別企画展「平成28年熊本地震」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月18日(水)~7月9日(土)までの間、減災館において、年間の特別企画展示のスケジュールを急遽変更し、第15回特別企画展「平成28年熊本地震」を開催しました。

2016年4月14日21時26分に熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5(震度7)の地震が起こり、その2日

後の4月16日1時25分には、マグニチュード7.3(震度7)の地震が、再び熊本地方を襲いました。その後も、熊本県から大分県にかけて、九州を横断するかたちで継続して地震が続き、最初の地震ですでに大きな被害を受けていた建物の被害が、2度目の地震で拡大しました。さらに、地震の揺れが継続したことから、住宅の倒壊を恐れた多くの人が避難所・車中で避難生活を送りました。

減災連携研究センターでは、地震発生直後より、被災地に先遣隊を派遣し、被災現場の状況把握を行なうとともに、今回の地震の被害像の究明に取り組みました。また、東海圏の人々に、被災状況をいち早く伝えるために、緊急報告会の開催(4月26日開催)、緊急災害情報集約拠点(MeDIC)の開設にも取り組みました。

今回の展示では、少しでも被災地の復興の一助になるようにと、解析・分析過程にある情報を幅広く公開しました。災害発生からわずか1ヶ月で開催した企画展は多くの人の関心を集めました。



展示会場の様子

シンポジウム「熊本地震に学び、今後に備える!」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、6月30日(木)、減災館において、同センターシンポジウム「熊本地震に学び、今後に備える!」を開催しました。本シンポジウムは、平成28年熊本地震から2ヶ月半が経過し、これまでの防災・減災の盲点は何かを見出し、今後の南海トラフ巨大地震への備えについて考えることを目的としたものです。



パネル討議の様子

まず福和同センター長からあいさつの後、3つのパネル討論と統合型地震応答体感環境「BiCURI」による地震の揺れ等の実演が行われました。「被災後の対応、復旧・復興のあり方を考える」では、鍵屋 一跡見学園女子大学教授らからの報告があり、災害時、行政対応には限界があることを知ったうえで、災害前に備えをしっかりとしておくことの重要性について議論されました。「熊本地震は想定内だったか～防災上の問題を考える」では、古村孝志東京大学教授らから九州や熊本地方における活断層・地震断層、地学の視点から報告があり、地域を知ることの重要性が示されました。その後、「BiCURI」を用いた熊本地震での益城町での震度7の揺れを実演し、「建築・土木構造物、地盤等の被害～南海トラフ地震への教訓」では、斉藤大樹豊橋技術科学大学教授らの報告があり、複合災害に対する備えや革新的な技術開発の必要性について指摘されました。

野田同副センター長から総括として、熊本の早期の復旧・復興を祈念するとともに、南海トラフ巨大地震を克服するための事前の徹底的な備え、リスク回避文化の醸成、産官学民や研究分野間の多様な連携の更なる展開への期待が述べられました。

名大を表敬訪問された方々 [平成28年4月16日～7月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
4月20日	中国	浙江大学から羅衛東副学長他一行4名	表敬あいさつ及び附属図書館見学
4月27日	ポルトガル	ポルト大学からマリア・マリノ副学長	表敬あいさつ及び国際教育交流センターとの打合せ等
4月27日	米国	ウェストバージニア州チャールズトン・カナワ郡巡回裁判所からトッド・J・カーフマン首席裁判官	表敬あいさつ
5月12日～13日	ラオス	ラオス教育省から高等教育局長、ラオス国立大学から副学長他2名	表敬あいさつ
5月17日～18日	ウズベキスタン	タシケント工科大学から研究者7名	表敬あいさつ
5月18日	モンゴル	モンゴル科学技術大学から教員等20名、賛光精機株式会社代表取締役会長他1名	表敬あいさつ及び施設・ラボ見学
5月20日	イギリス	ヨーク大学から国際交流課カール・ワード氏	表敬あいさつ、意見交換、サマープログラムの宣伝
5月24日	中国	厦門大学から研究者等7名	表敬あいさつ及び施設見学
6月6日	フランス	ソルボンヌ大学から元学長ジャン＝ロベール・ピット氏	国際研究集会にて基調講演及び表敬あいさつ
6月14日	カンボジア	カンボジア王立農業大学から副学長セグ・モン氏	レクチャー及び表敬あいさつ
6月15日	イタリア	パドヴァ大学から研究者1名	表敬あいさつ及び意見交換
6月17日	フランス	ストラスブール大学から研究者1名	表敬あいさつ及び意見交換
6月29日	韓国	全北大学から学長他30名	益川教授との懇談、表敬あいさつ、意見交換
7月5日	イギリス	カーディフ大学から副学長ノラ氏	表敬あいさつ及び意見交換
7月12日	アメリカ	ノースカロライナ州立大学から副学長他2名	表敬あいさつ及び打合せ等
7月13日	イギリス	ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジから学部長、学生6名	表敬あいさつ
7月13日	ベトナム	ベトナム最高人民検察院からレ・フー・テー副院長他17名	表敬あいさつ

新たに締結した学術交流協定 [平成28年4月16日～7月15日]

大学間学術交流協定

締結日	国/地域	大学/研究機関名
2月23日	デンマーク	オーフス大学 ※
6月3日	中国	大連理工大学
6月9日	カナダ	カルガリー大学

部局間学術交流協定

締結日	国/地域	大学/研究機関名	部局名
3月18日	韓国	延世大学校物理学・応用物理学研究所 ※	素粒子宇宙起源研究機構
3月28日	モンゴル	モンゴル国立教育大学 ※	教育学部・教育発達科学研究科
4月21日	韓国	ソウル国立大学校アジア太平洋法研究所	法政国際教育協力研究センター

※名大トピックス No. 276 (5月号) からの追加

構成員を対象とした研修 [平成28年4月16日～7月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
4月28日(木)～7月15日(金)まで、計16回	ハラスメント防止研修	構成員のハラスメントに対する認識を深めるとともに、防止意識を高めるため	342名
5月12日(木)	ハラスメント防止研修会及び新任教員説明会	工学研究科の新任教員を対象に、教育体制及び教育研究支援体制等の基礎的な知識の取得を目的に実施する。併せて、ハラスメント防止についての研修を行う	22名
5月14日(土)	第2回 LAMMPS 利用入門セミナー	分子動力学ソフトウェアでニーズの高い「LAMMPS」の利用導入からスパコンでの大規模計算までを行うハンズオンセミナー	9名
5月19日(木)～20日(金)	平成28年度東海地区国立大学法人等職員基礎研修	東海地区国立大学法人等機関での勤務経験が半年以上2年未満の者に対し、法人職員の心構え等を改めて習得させるとともに、共通して必要な業務遂行上の基礎知識及び能力を養成	122名
5月25日(水)～26日(木)	平成28年度図書系職員初任者研修	附属図書館に新たに採用された職員、異動により転入した職員及びこれから図書業務を担当予定の職員に対し、図書館業務遂行に必要な基礎的な知識と技術を習得させることを目的とする	21名
5月27日(金)	平成28年度農学部・生命農学研究科新任事務職員等研修	新任事務職員等を対象にして、附属フィールド科学教育研究センター稲武、設楽東郷の各フィールドに赴き、各施設の理解を深め事務等の円滑化及び更なる充実等を図る	8名
6月8日(水)	並列プログラミング講習会(初級向け)	スーパーコンピュータの利用促進と並列プログラミング技術の普及を目的として並列処理プログラミングの初心者を対象とした入門講習	5名
6月15日(水)	平成28年度名古屋大学主任研修	名古屋大学職員の主任として職場における役割を自覚し、係長への準備段階として身につけておくべき態度や意識、リーダーシップ発揮に必要な諸能力を養う	20名
6月27日(月)	第1回 TOEIC IP テスト	特に若手職員を対象に受験の機会を提供することにより、自己の実力を知り、自身の自己啓発の動機づけに繋げる	41名

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
1 堀 克敏工学研究科教授らは細菌など微生物の細胞の表面を毛のように覆うタンパク質を、本体を傷つけずに取り除く手法を開発	6.17 (金)	中日 (朝刊)
2 本学留学生会の中心メンバーが毎日新聞中部本社を訪れ、熊本地震の義援金10万円を寄託し、同会会長のアブア・クアミ・オセンス・メラドさんは「バザーでは日本の多くの方々には物品を支援していただいた。今度は私たちがお返ししたい」と語る	6.17 (金)	毎日 (朝刊)
3 立松財団2016年度研究助成：片山尚幸工学研究科准教授、松岡 健工学研究科助教	6.17 (金)	中部経済
4 わが友わが学び舎：東海の同窓会 愛知県立半田高等学校同窓会「校友会」平野真一元総長と日本経済団体連合会会長 榊原定征氏本学卒業生らが名を連ねる	6.17 (金)	中部経済
5 ミクロの探検隊⑤「名古屋大学のムシを電子顕微鏡で観察しよう！」開催：7月9日、8月20日	6.18 (土)	朝日 (朝刊)
6 紙つぶて：蝶々夫人の生き方 四方義啓本学名誉教授	6.18 (土)	中日 (夕刊)
7 第57回藤原賞贈呈式：17日 藤吉好則創薬科学研究科特任教授に賞状とメダル、副賞1000万円が贈られた	6.18 (土)	読売
8 松尾総長は本学同窓会遠州支部総会で「人文科学系は縮小せず、理工系は世界を目指したい」と語る	6.19 (日)	中日 (朝刊)
9 日本経済学会春季大会開催：18、19日 根本二郎経済学研究科教授らの進行で意見交換等が行われた	6.19 (日)	中日 (朝刊)
10 駐名古屋大韓民国総領事杯 日韓スピーチ大会開催：18日 最優秀賞 木村あずささん本学大学院生	6.19 (日)	中日 (朝刊)
11 名古屋メダカ 増えたよ 故山本時男本学名誉教授が千種区平和公園で採取したニホンメダカの地域固有種を繁殖させる東山動物園の里山プロジェクトが本年も始まった	6.19 (日)	中日 (朝刊)
12 本学や中部大学の学生でつくる「ivote 愛知」は愛知選挙区の立候補予定者らから若者に投票の大切さを訴える動画を募っている	6.19 (日)	読売
13 東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授らのグループは、植物のめしべの中に、花粉を卵細胞と結びつける媚薬のような物質があることを突き止め「アモール」と名付けた	6.19 (日) 6.20 (月) 6.21 (火)	日経 (朝刊) 中部経済 毎日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
14 ストップがん離職:専門家が就労アシスト 医学部附属病院で行われた「がんとともに働く人のための講座」の様子 が取り上げられる	6.20 (月)	中日 (朝刊)
15 中日文化センター 開講50周年記念企画:「世界を照らすLED」開催:7月21日 天野 浩未来材料・システム研究所 教授が講演	6.20 (月)	中日 (夕刊)
16 キラリ研究開発:第194回モノづくりと未来のエネルギー 名古屋大学プラズマ科学プラットフォーム(3) 大野哲靖 工学研究科教授、堀 勝未来社会創造機構教授がプラズマについて解説	6.20 (月)	日刊工業
17 統合物質創製化学研究推進機構開所式開催:22日 野依良治本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授 らが講演	6.20 (月)	日刊工業
18 尾崎紀夫医学系研究科教授らは統合失調症患者の9%に、発症に関係するとみられる遺伝子の突然変異があること をつきとめた	6.21 (火)	中日 (朝刊)
19 生活不安 中間層にも拡大 弁護士樽井直樹氏本学卒業生は「貧困は、より多くの国民に身近な問題になりつつある」 と語る	6.21 (火)	中日 (朝刊)
20 「紙つぶて」の新しい筆者:株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	6.21 (火)	中日 (夕刊)
21 愛知県医師会健康教育講座開催:7月12日 梶山広明医学系研究科准教授が「知っておきたい!身近なカラダの不 調に対する漢方薬治療」をテーマに講演	6.21 (火)	読売
22 学術研究・産学官連携推進本部主催 Tongali シンポジウム ースタートアップセミナーー開催:7月2日	6.21 (火)	中日 (朝刊)
23 タイムズ・ハイヤー・エデュケーションがアジアの大学ランキングを発表し、本学は34位だった	6.21 (火) 6.22 (水)	日経 (朝刊) 読売
24 素顔のアスリート:天才再生へ「亜由子計画」日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生	6.22 (水)	朝日 (朝刊)
25 数理ウェブ開催:25日 伊師英之多元数理科学研究科准教授が「キャベツの黄金比」と題して講演	6.22 (水)	中日 (朝刊)
26 記者の目:「水素水」論争に向けて「エセ科学」とは言えない 大野欽司医学系研究科教授の研究で水素の作用の本 質は活性酸素の抑制ではなく、ヒトの細胞内の分子に作用し、遺伝子の働きを調節することも分かっていると取り 上げられる	6.23 (木)	毎日 (朝刊)
27 統合物質創製化学研究推進機構開所式開催:22日 野依良治本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授 らが講演し、野依良治本学特別教授は「若い世代を中心に、スピード感を持って世界を先導してほしい」と語る	6.23 (木)	中日 (朝刊) 他2社
28 注目を集めるe-テキスタイル ウエアラブル端末素材として期待 間瀬健二情報科学研究科教授がサブリーダーを努 める知の拠点あいち重点研究プロジェクト「超早期診断技術開発プロジェクト」の「究極のウエアラブルシステムの 開発」が取り上げられる	6.23 (木)	中部経済
29 第100回陸上日本選手権 展望⑥:日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生は「今までの強い人たちは、両方しっ かり走っている」と語り、女子5000メートルと1万メートル両方全力勝負を強調	6.23 (木)	読売
30 本学は起業家育成を目的とした講座「Tongali (トンガリ) プロジェクト」を始めると発表し、松尾総長は「ものづ くり産業が集積する名古屋地域は、起業については遅れているといわれてきたが、名大からも少しずつ起業を考え る学生が出始めている」と語る	6.23 (木)	日経 (朝刊)
31 名古屋大学英文学会サマー・セミナー:7月8日 文学部1階大会議室で行われる	6.24 (金)	朝日 (朝刊)
32 本学が「IR (インスティテューショナル・リサーチ) 本部」を設置	6.24 (金)	中日 (朝刊)
33 公開セミナー「天文学の最前線2016」開催:8月2～4日 本学と名古屋市科学館が主催	6.24 (金)	中日 (朝刊)
34 東海社会学会大会シンポジウム「まち」と「縁」の創造ー協働性を編み直す開催:7月9日 小松 尚環境学研究科 准教授が講演	6.24 (金)	中日 (朝刊)
35 日本選手権が名古屋で開催されることについて日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生は「地元でプレッシャー がないと言えようそになるが、それを力に変えたい」と語る	6.24 (金)	中日 (朝刊)
36 本学と名古屋工業大学は坂本ドネイション・ファウンデーションから株の寄付を受けて給付型奨学金「ホシザキ奨 学金」を創設し、松尾総長は「日本の将来のものづくりに関する人材の育成に全力を尽くしていく」と語る	6.25 (土) 6.26 (日) 6.27 (月)	日経 (朝刊) 他3社 中日 (朝刊) 日刊工業
37 紙つぶて:紅顔の下に 四方義啓本学名誉教授	6.25 (土)	中日 (夕刊)
38 第100回日本陸上競技選手権大会:女子10000メートル優勝 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生 リオデジャ ネイロオリンピック代表に内定	6.25 (土)	中日 (朝刊) 他3社
39 日本学士院第106回授賞式:27日 日本学士院エジンバラ公賞 松岡 信生物機能開発利用研究センター教授	6.27 (月)	日経 (夕刊)
40 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生がリオデジャネイロ五輪の女子1万メートルと5000メートル代表に選 出された	6.27 (月)	中日 (夕刊)
41 「SAKE (酒) 大学イン名古屋」開催:7月3日 本学が作った日本酒が出品される	6.28 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
42 福和伸夫減災連携研究センター教授は内閣府が東海地震に備えた大規模地震対策特別措置法の見直しに向け、有識 者会議を設置すると発表したことについて「異常な現象を観測したときに、どう情報を伝達し、行動していくのか が議論のポイントになる」と語る	6.28 (火)	日経 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
43 リオデジャネイロオリンピックに出場する日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生が本学を訪れ松尾総長から花束を受け取り「リオまで時間がある。もう一度練習してレベルアップして臨みたい」と語る	6.28 (火)	日経 (夕刊)
	6.29 (水)	毎日 (朝刊)
		中日 (朝刊)
	6.30 (木)	朝日 (朝刊)
44 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生の壮行会が日本郵政本社で行われ「納得のいく走りをし、リオから元気を発信できるようにしたい」と語る	6.30 (木)	中日 (朝刊)
45 東村副理事・生命農学研究科教授は女性の活躍について「女性だけではなく性別に関わりがなく活躍できることが重要。多様性がある社会になれば、個人個人の幸せも高まる」と語る	7. 1 (金)	中日 (朝刊)
46 全国国公立・有名私立大学相談会：24日 本学の入試担当者が学部の特徴や入試などの相談に個別に応じる	7. 1 (金)	朝日 (朝刊)
47 病院の実力：大人の心臓病 本学の治療実績が取り上げられる	7. 3 (日)	読売
48 転機「モノでなく、睡眠の質売る」株式会社エアウィーブ会長高岡本州氏本学卒業生	7. 5 (火)	毎日 (朝刊)
49 知の拠点あいち重点研究プロジェクトの第二期分として、天野 浩未来材料・システム研究所教授と協力し豊田合成株式会社、株式会社ビートソニックがLEDの高性能化を目指す取り組みが選ばれた	7. 5 (火)	中日 (朝刊)
50 鈴木康弘減災連携研究センター教授は全国地震動予想地図の公表について「大事なことは、地図をきっかけにして、どれだけ地震の危険があるのか、どれだけ揺れるのかを把握することだ」と語る	7. 5 (火)	中日 (朝刊)
51 震える世界 英EU離脱を聞く→3：自由貿易 価値揺るがず 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生	7. 5 (火)	日経 (朝刊)
52 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生について同監督高橋昌彦氏は「有森さんタイプで普段は繊細。本番で勝負強さを発揮する」と語る	7. 6 (水)	中日 (朝刊)
53 未踏の世界へ 有機化合物作る触媒発見 山本 尚本学名誉教授	7. 7 (木)	毎日 (朝刊)
54 紙つづて：輸出貿易の志 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	7. 7 (木)	中日 (夕刊)
55 本学や宇宙航空研究開発機構などは壊れる前のエックス線天文衛星「ひとみ」が、銀河団の中心部にあるブラックホール周辺の高温ガスの観測に成功していたと発表	7. 7 (木)	中日 (朝刊) 読売
56 蒲郡商工会議所70周年記念講演会：6日 トヨタ自動車株式会社社長内山田竹志氏本学卒業生が講演	7. 7 (木)	中部経済
57 個性を活かす 国立大学改革⑭：根本的に運営方法を改革 松尾総長	7. 7 (木)	日刊工業
58 自動運転、事故時の法的責任は 本学が主導する公道を使った実証実験に東京海上日動火災保険株式会社が参画	7. 7 (木)	日刊工業
59 第98回全国高等学校野球選手権愛知大会：教育学部附属高等学校の出場メンバー紹介	7. 8 (金)	毎日 (朝刊)
60 福島和彦生命農学研究科教授と日本メナード化粧品株式会社は人間の皮膚に塗った化粧品成分が、表面からどう浸透するか、拡大画像で見える形で分析できる手法を開発	7. 9 (土)	中日 (朝刊)
61 本学で東北大学や大阪大学など六大学共同で環境、生体医療の分野で生活に役立つ材料の研究開発を進めるプロジェクトのスタートを記念するキックオフ公開討論会が開かれた	7. 9 (土)	中日 (夕刊)
62 菅ななこさん経済学部2年生は「私たちの世代は将来に漠然とした不安を感じている人が多い」と語る	7.10 (日)	読売
63 山中章弘環境医学研究所教授らは、スポーツ中など興奮している時はけがをしてもあまり痛みを感じないが、落ちて着いてきた際に痛みを感じ始めるという仕組みの一端を解明	7.11 (月)	日刊工業
64 坪木和久宇宙地球環境研究所教授らは、航空機を用いた台風の直接観測を始める	7.12 (火)	日刊工業
65 本学は2017年度の入学者選抜要項を発表	7.13 (水)	中日 (朝刊)
66 叙位叙勲：正四位 内山道明本学名誉教授	7.13 (水)	中日 (朝刊)
67 石原一彰工学研究科教授と株式会社カネカは固形次亜塩素酸ナトリウムの用途開拓に取り組んでいる	7.13 (水)	化学工業日報
68 愛知排泄ケア研究会市民公開講座「ズバリ！聴きます、あなたによって排泄ケアって何ですか？」開催：18日 医学部附属病院中央診療棟3階講堂で行われる	7.14 (木)	読売
69 耳の痛い話こそ信頼回復に 丹羽宇一郎本学名誉博士	7.14 (木)	日経 (朝刊)
70 紙つづて：食器の和と洋 株式会社ノリタケカンパニーリミテド会長種村 均氏本学卒業生	7.14 (木)	中日 (夕刊)
71 本学や産業技術総合研究所が共同で学内にパワー半導体の研究拠点を作り、トヨタ自動車株式会社が2研究部門を立ち上げるなど産学官がタックを組む	7.15 (金)	日経 (朝刊)
72 宇宙地球環境研究所公開講演会「嵐を測る」開催：30日 三好由純同研究所准教授、三宅美沙宇宙地球環境研究所特任助教らが講演	7.15 (金)	毎日 (朝刊)
73 愛知サマーセミナー2016開催：16日 天野 浩未来材料・システム研究所教授が講演	7.15 (金)	中日 (朝刊)
74 本学はリクルートの調査による高校3年生を対象とした大学志願度ランキングの東海地区で1位になった	7.15 (金)	中日 (朝刊)

第12回名古屋大学ホームカミングデイ

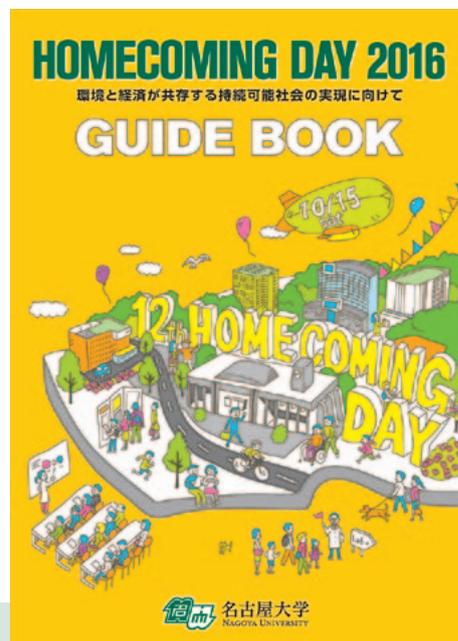
「環境と経済が共存する

持続可能社会の実現に向けて」を10月15日(土)に開催

ホームカミングデイには、「故郷に帰る」という意味が込められています。本学の同窓生、教職員OB・OG、在校生のご家族、地域の皆様をお招きし、本学の教育・研究活動の一端に触れていただく重要な行事として、毎年10月の第3土曜日に開催しています。

第12回目となる今回のメインテーマは「環境と経済が共存する持続可能社会の実現に向けて」としました。名古屋大学における新しい発見や技術革新が、社会の持続的な発展にどのように貢献できるのか、また、地球的諸問題に対して、我々自身がどのように社会に貢献し、持続できるのか、皆様と一緒に考えていきたいと思っております。

主なイベントを以下にご紹介します。この他にも、各学部・研究科等において、同窓生・保護者の皆様向け行事等も企画しておりますので、パンフレットやホームページをご覧ください。どなたでもご参加いただけますので、ご家族、ご友人の皆様とお誘い合わせの上、是非、お越しください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。



主なイベント

【名古屋大学の集い】

- ・国際交流貢献顕彰授与式
- ・名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサート

【学術講演】

- ・「アジアへ日本公害史の教訓を－公害は終わらない」

【市民公開講座等】

- ・「神経難病・認知症の最前線～治療と予防をめざして」
 - ・「地球温暖化と再生可能エネルギーの今後」
 - ・「歴史的環境の評価と再生－持続的発展を考える一助として」
 - ・「最新脳科学が解き明かす睡眠の謎～ヒトはなぜ眠るのか?」
 - ・「高齢者のリハビリテーション～健康寿命をのばそう」
- ほか

【学生による活動紹介】

- ・能実演、NU MIRAI2016 TALK

【体験企画】

- ・あかりんご隊科学実験「生命の秘密！DNA ってなあに!？」
- ・名古屋グランパス・スクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室

【施設公開】

- ・ナショナルイノベーションコンプレックス (NIC)
- ・トランスフォーマティブ生命分子研究所 (ITbM)
- ・減災館 ・赤崎記念研究館展示室
- ・2008ノーベル賞展示室 ・ケミストリーギャラリー

【見学ツアー】

- ・超高压電子顕微鏡施設見学ツアー
- ・劣化橋梁施設 N²U-BRIDGE の見学
- ・メディアスタジオ見学ツアー
- ・スーパーコンピュータ見学ツアー

【図書館・博物館・大学文書資料室企画】

- ・オープンライブラリー
- ・秋季特別展「旗本高木家の幕末」
- ・博物館企画展「台湾 朱振南 書画の世界
－書による日台文化交流と後藤新平の再評価」
- ・博物館企画展関連企画「書による日台文化交流」
- ・博物館公開講演会
「大学博物館が語る、地球と人類のヒストリー」
- ・野外観察園公開
- ・名古屋大学創基145周年記念展
「仮病院・仮医学校から名古屋帝国大学への道」

【販売コーナー】

- ・農産物の販売 ・本のリユース市
- ・生協の名大グッズ等の販売

【各種相談会】

- ・卒業生子育て支援企画：名大パパ+ママカフェ
 - ・就活サポーター OB・OG プレゼンツ～己を知ろう、働き方を探ろう！～
- ほか

お問い合わせ先

総務部広報渉外課 TEL：052-747-6558, 6559 E-mail：home-coming@adm.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学ホームカミングデイホームページ <http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/home-coming-day/>

概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2016」を刊行

本学では、このたび概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2016」を刊行しました。

本誌は、本体編と資料編（各年1回発行）の2冊で構成されています。本体編は、「名古屋大学の強みを発信する」をコンセプトに制作しており、今年度は「松尾イニシアティ

ブ NU MIRAI 2020」をテーマとし、「MIRAIへの挑戦者。」と題して、インタビュー形式でわかりやすく本学を紹介しています。資料編は、数字等のデータにより、本学の取り組みを客観的に紹介しています。

ご入り用の方は、広報渉外課で入手できます。

また、高校生向けパンフレット「GUIDE TO NAGOYA UNIVERSITY 2017」（年1回発行）も刊行しました。

ご入り用の方は、入試課で入手できます。



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月8日(月)～10月21日(金)

場 所：博物館野外観察園
セミナーハウス2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館スポット展示「ユーフラテスの春」

[関連特別講演会]

10月7日(金)

場 所：博物館3階講義室

時 間：13:30～15:00

講演題目：「名古屋大学によるシリア、ユーフラテス河流域の調査」

講 演 者：門脇誠二（博物館講師）

講演題目：「シリアの印象—ユーフラテスの自然と街、人々」

講 演 者：星野光雄（本学名誉教授）

参 加 費：無料



8月23日(火)

場 所：情報基盤センター4階演習室

時 間：13:00～14:30

定 員：40名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

平成28年度第5回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「リモートアクセスの仕組みと利活用について」

内 容：情報技術の最新動向について

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月2日(金)

場 所：豊田講堂、シンポジオン
 時 間：13:00～18:00
 対 象：一般
 参 加 費：無料

テクノ・フェア名大2016

講演題目：「名古屋大学発のオープンイノベーション『お付き合い』の産学連携から『本格的な産学共同研究』へ」
 講演者：西山崇志（本学総長補佐、学術研究・産学官連携推進本部教授）
 内 容：講演、研究シーズ・研究成果展示、ショートプレゼンテーション、研究室見学

[問い合わせ先]

工学部・工学研究科総務課 052-789-3413

9月6日(火)

場 所：ES 総合館1階 ES ホール
 時 間：10:00～17:30
 対 象：一般
 参 加 費：無料（情報交換会は3,000円）

第5回情報科学研究科附属組込みシステム研究センターシンポジウム

内 容：講演、活動紹介、成果発表、ポスター展示、他

[問い合わせ先]

情報科学研究科
 附属組込みシステム研究センター
 052-789-5186

9月8日(木)、9日(金)

場 所：豊田講堂
 時 間：9:00～17:45 (9/8)、
 9:00～15:50 (9/9)
 対 象：一般
 参 加 費：2,000円（当日参加は3,000円）

2016年度機器・分析技術研究会

講演題目：「世界を照らすLED」
 講演者：天野 浩（未来材料・システム研究所教授）
 内 容：技術系職員が技術研究発表や討論を通じて技術の研鑽と向上を図りさらには相互の交流と協力により技術の伝承をもふまえてわが国の学術振興における技術支援に寄与することを目的とする

[問い合わせ先]

全学技術センター
 機器・分析技術研究会実行委員会
 tech2016@tech.nagoya-u.ac.jp



9月8日(木)

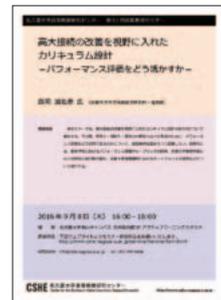
場 所：文系総合館5階
 アクティブラーニングスタジオ
 時 間：16:00～18:00
 対 象：本学および近隣の大学関係者
 参 加 費：無料

高等教育研究センター 第81回客員教授セミナー

講演題目：「高大接続の改善を視野に入れたカリキュラム設計ーパフォーマンス評価をどう活かすかー」
 講演者：西岡 加名恵氏（京都大学准教授）
 内 容：高等学校におけるパフォーマンス課題やルーブリックの開発、京都大学教育学部における特色入試の取り組み、京都大学教職課程におけるポートフォリオの活用などについて紹介する

[問い合わせ先]

高等教育研究センター
 教授 夏目達也 052-789-5693



9月10日(土)

場 所：理学南館1階坂田・平田ホール
 時 間：13:30～16:30
 定 員：300名
 対 象：中学生以上、一般
 （興味のある小学生も可）
 参 加 費：無料

ひので衛星10周年記念講演会

「太陽観測から宇宙と地球を探る」

講演題目：「『ひので』 参上ー太陽研究新時代の幕開けー」
 講演者：原 弘久氏（自然科学研究機構国立天文台准教授）
 講演題目：「太陽表面は6000度、上空大気は100万度の謎を追え！」
 講演者：清水敏文氏（宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所准教授）
 講演題目：「太陽フレアから地球を守れ！」
 講演者：草野完也（宇宙地球環境研究所教授）
 講演題目：「『ひので』の先へ！ーこれからの太陽研究ー」
 講演者：一本 潔氏（京都大学教授）

内 容：2006年9月の打ち上げから10年となる太陽観測衛星「ひので」による観測を通じてこれまでに明らかになったことやいまだに解明されていないことについての講演

[問い合わせ先]

宇宙地球環境研究所
 教授 草野完也 052-747-6333



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月10日(土)

場 所：松本市立博物館分館
重要文化財馬場家住宅
(長野県松本市)

時 間：13:00~17:00

定 員：30名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

重要文化財馬場家住宅研究センター
052-789-3748

重要文化財馬場家住宅研究センター 平成28年度公開講座「馬場家文書と馬場家住宅が語る 文化と歴史—遺産の魅力」

講演題目：「高島藩主の巡見と馬場家」

講 演 者：石川 寛 (重要文化財馬場家住宅研究センター特任准教授)

講演題目：「明治初期の旧婚旅行—馬場家12代当主夫妻の旅をたどって—」

講 演 者：服部亜由未 (同招へい教員、愛知県立大学講師)

内 容：講演、重要文化財馬場家住宅と周辺見学、意見交換、他



9月18日(日)

場 所：野依学術交流記念館

時 間：13:00~17:00

対 象：一般

参 加 費：無料

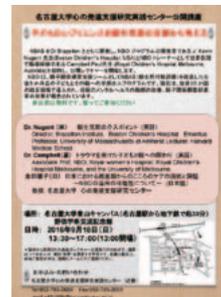
[問い合わせ先]

心の発達支援研究実践センター
052-789-2658

心の発達支援研究センター 公開レクチャー

テ ー マ：「子どものレジリエンスを新生児期の支援から考える」

内 容：生後3か月までの子どもと親への関係構築を支援することの
意義と介入の在り方について最新の知見から考える
(使用言語は英語で通訳なし。和訳の資料あり)



表紙サークル紹介



表紙
練習風景 (ヨット部)
(平成28年6月26日)

ヨット部

私達が乗るヨットは風や波などの自然の力だけで動く船です。エンジンもなければ手で漕ぐものでもなく、三角形の帆に風をうまく当てて走ります。顔を撫でるそよ風から海面に白波が立つ強風まで、自然を相手に技量を磨いています。大会では自然の条件に加えて、頭を使ってライバルと風を奪い合いながら戦います。ヨットは体と頭をフルに使うことができる、まさに『スポーツの王様』ともいえる競技です。また、海と山に囲まれた風光明媚な蒲郡市で、愛知県内の他の大学や実業団と一緒に練習をしています。他のチームとは海の上では良きライバルですが、陸の上では仲の良い友達であるように、大学の垣根を超えた楽しい付き合いをしています。

名大トピックス No.279 平成28年8月17日発行

編集・発行/名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601) TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>) でもご覧いただけます。

172 25年前の名大祭 — 名大祭いまむかし② —

今回は、前回の50年前に続き、25年前の名大祭を取り上げます。

第32回名大祭は、1991(平成3)年6月5日(水)午後から9日(日)にかけて、「未来への足跡」をテーマとして開催されました。この年の会期は4日半で、現在に比べれば1日長いのですが、それでも1989年から半日短縮されたものです。1970年代から始まった名大祭の娯楽化は、80年代にさらに進みましたが、同時に参加する名大生の減少という問題を生じさせることにもなりました。

この年のパンフレットには、名大祭本部実行委員長による「名大祭を考える」という文章が載っています。そこには、せっかくの休講を名大祭のために使わない学生の増加を批判する一方で、本部が自ら企画を行うことに夢中になるあまり、新しい有志団体の参加を妨げていたことを反省し、今回から本部企画を減らし、有志団体の参加を促進することをめざしたと書かれています。

パンフの索引で数えると、この年の企画数は72と、今年の169企画に比べて意外に少ないことがわかります。有志企画数は45で全体の6割強を占めますが、今年の有志企画数104(学術企画を除く)の半分以下です。ただその一方で、現在は衛生面に配慮して30数店に制限している模擬店が、この年は129店を数えています。現在は模擬店が減った分、有志企画の多彩化が進んだといえます。

この年の学術企画数(講演会含む)は25と、今年の42企画に比べると少ないですが、企画の総数に占める割合は現在より大きくなっています。そして、学術企画の担い手が名大祭本部と学部(学部祭)である点も、ほとんどが有志企画になっている現在と大きく異なっています。

こうしてみると、この年に打ち出された有志企画による名大祭の活性化は、すぐに効果が出たわけではないにしても、紆余曲折を経ながらも実現していったといえるでしょう。



1	2	3
4	5	

- 1 第32回名大祭のパンフレットの表紙。この25年前に比べるとテーマがかなり簡略になり、企画との関連もほとんど見られなくなった。
- 2 第32回名大祭のプレ企画として、5月26日に行われた仮装行列。若宮広場から名城公園という、現在とはかなり違ったルートを行進した。
- 3 豊田講堂前のステージでのイベント(第32回名大祭)。
- 4 第2グリーンベルト(中央図書館前)でのグリーンフェスティバル(第32回名大祭)。バンドの演奏を中心とするもので、1977年の第18回名大祭から第47回名大祭まで30年続いた。
- 5 第32回名大祭のファイヤーストーム。土曜日の夜に、第3グリーンベルト(中央図書館裏)で行われた。ファイヤーストームは、2009年の第50回名大祭が最後となった。